

ヴァイツゼッカー著 木村 敏訳

『病いと人 医学的人間学入門』

評者・神田橋條治



新曜社
本体四八〇〇円

少しばかり暴言を吐こう。こころと身体とを切り離すことで発展してきた医学が、医療の場で限界をあらわにするようになり、医の黎明期からすでに医療現場では周知であったところの関与に目を向けることで、心身医学が誕生した。そうした誕生のいきさつから、心身医学はつぎの二つのいずれかを自己のアイデンティティとすべきであった。①身体医学を補完したりすまを埋める役割（いわゆるリエゾン精神医学の役割）、②ところを取り戻すことで医学や医療の、哲学から技術までの全体を再編成して、新たな医学・医療を提唱する役割。残念ながら、現在の心身医学はそのいずれの役割も果たさず、ただ単に、医学の分野が一つ増えただけに終わっている。ヴァイツゼッカーは言う、「身体科学を心理学でもって補完すれば、それだけでいわゆる唯物論／物質主義が克服できるわ

けではない。われわれがむき出しの客観性のもつ危険を排除できると思っっているのは、対象の中へ主体／主観を導入するという歩みによつてでしかない。現在の心身医学は自然科学にすり寄りひたすら客観性を追及した結末として、従来の医学の一ジャンルに墮してしまった。ヴァイツゼッカーは言う、「医学の目標は……あくまでも医者としての使命にあるのだ、……認識それ自体ではなくて治療が、その目標なのである」。さらに「われわれは思索や一般化や統一を充分尊重はするけれど、われわれが出発点として選ぶのはあくまで知覚、観察、実験などの経験なのだ」と。ヴァイツゼッカーはつねに現場で、ということは患者と自分自身とが置かれているその場で、みずからに問いを発し、それに答えようと模索しつづける。その中間報告が本書である。中間

報告たらざるをえないのは、ヴァイツゼッカーの問いがすべて、あまりに根源的な内容だからである。具体的な患者を前にして、彼はみずからに問う、「なぜほかならぬこの症状なのか（局在）」「なぜほかならぬこの症状なのか」「いづれ（始まり）」「なに（本質）」「なぜ（意味）」「効くとは」「治るとは」。いづれの問いも決して決着のつかないであろう性質の問いである。それに取り組むべくヴァイツゼッカーは知的に彷徨する。自然科学・医学史・哲学・論理学・精神分析などなどの膨大な知識が動員される。そのせいで、知識の乏しい評者はしばしば読み進むのに難渋した。しかし、ヴァイツゼッカーはそれらの知識にもたれかかつて論を進めるわけではない。知識は参照されるものに過ぎず、知の作業とは緻密に問い続け答えを模索する営為である、と彼が示しているのだと考えて取り組むと、再読・三読と重ねるにつれ知識の部分もなにやらぼんやりと感じ取られてくる。それは、緻密な討論と推敲を経た訳文のせいもあるろう。

もこの歴史の流れのなかで現れて、病気を形づくるのである」との見地を採用する。言い換えると「病的な生命現象を、生命それ自身の表徴として理解しようとしている」その見地から「因果的に考えることより、意味を認識することこそ大切なのだ」という主張が導きだされ、「医療行為」というものはすべてそれ自体としてある種の安楽死なのである。そこで問題は、安楽死が是か非かではなく、どんな種類の安楽死か、ということになる」との主張も生まれる。「心と身体は生命／人生のドラマで互いに他方を代理しうる」という主張、それを支える経験上の事実とは、なにやらぼんやりと感じ取られる、経験を共有しない他者を説得しえない、それでいて重みある確かな認識である。その確かさを支えるのは絶えず緻密に問い続ける知の作業である。その点は、他者を容易に説得する力をもつ認識が、多くの場合、緻密な問いの作業を経ているのと同対照的である。正しい目標へ向けて問い続ける知の作業は、未完のままでも、これほどに豊かな世界を読者に／聞き手にもたらすのかと感嘆する。（かんだばし・じょうじ／伊敷病院）